

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	古川 萌
論文題目	ジョルジョ・ヴァザーリと美術家の顕彰 ——16世紀後半フィレンツェにおける記憶のパトロネージ		
<p>本論文は、16世紀イタリアの画家・建築家・著述家ジョルジョ・ヴァザーリを取り上げ、一次資料の読解と作品の解釈を通して、その活動の儀礼的側面を浮かび上がらせることを目的とする。とくに「美術家を顕彰する」行為に着目し、ヴァザーリがパトロンであるフィレンツェ公コジモー世・デ・メディチのためにおこなった事業のなかで、美術家の顕彰に関わる要素——碑銘の収集、葬儀の演出、墓碑の構想、遺品としての素描の収集など——に焦点を当てる。そしてそれを、当時のフィレンツェの文化的・社会的・政治的背景に照らしながら検討することで、「美術史の父」としてのヴァザーリを理解するための新たな視点を提示することを目論む。</p> <p>本論文は序論と結論には含まれた三部構成からなる。すなわち、Ⅰ. 「『美術家列伝』と美術家の死」、Ⅱ. 「アカデミア・デル・ディセーニョと美術家の顕彰」、Ⅲ. 「ヴァザーリと作品展示」である。</p> <p>まず第Ⅰ部では、13世紀末からミケランジェロまでのイタリアの画家・彫刻家・建築家の伝記を収録したヴァザーリの主著、『美術家列伝』と、美術家のためのエピタフに光が当てられる。エピタフとは美術家のための墓碑銘や追悼詩を指し、とりわけ『美術家列伝』第一版(1550年)においては、収録された各伝記の末尾に記載された。エピタフを詳細に検討することで、本論文は、個々の伝記が、美術家に捧げられたいわば「墓碑」のようなものであったのではないか、という興味深い仮説を提起する。とすると、『美術家列伝』は、それらの墓碑を年代順に並べた教会堂の空間にもなぞらえられることになる。さらにこれらエピタフが、かつて共和制の時代にあって、偉大な美術家が亡くなった際にメディチ家が丁重に弔ったという逸話とともに提示されることにより、コジモー世の君主制の現在と共和政時代の過去のメディチ家との連続性を印象づける効果をもたらしたであろうことが指摘される。</p> <p>つづく第Ⅱ部では、美術家の弔いと顕彰を組織的におこなった例として、1563年に発足した史上最初のアカデミー組織、アカデミア・デル・ディセーニョの活動が取り上げられる。このアカデミアは、若い美術家の教育や仕事の斡旋といった活動で知られているが、それ以上に本論文が着目するのは、美術家の埋葬と弔いもおこなっていたことである。とりわけ、その活動最初期の大規模な事業として、1564年にローマで没したミケ</p>			

ランジェロの葬儀と墓碑建立を、一次資料と先行研究をもとにつまびらかに再構成し、その経緯を検討することで、ヴァザーリのほかの事業との連続性が示される。さらに、アカデミアの拠点であったサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂附属の「画家の礼拝堂」にも着目し、ヴァザーリがその実現に深くかかわったこの場所が、いかに美術家の死に際して、その顕彰をおこなう場として機能していたかについて、そこに設置された複数の彫刻や絵画の図像的、様式的な特徴から明らかにしていく。

最後に第Ⅲ部では、『美術家列伝』（第二版、1568年）において論じられた13世紀末から16世紀後半までの美術家たちの作品についてヴァザーリがどのような態度をとったのか、展示とコレクションという観点から考察する。まず、主に古代のブロンズ像やコインなどからなるコジモー世のコレクションの陳列室、ヴェッキオ宮「カリオペの書斎」における作品展示を取り上げ、ヴァザーリが特定の作品を同じ場で見せることによって、その歴史的な文脈——発展の図式——を早くも可視化しようとしていた可能性について論じる。さらにここでは、とりわけトスカーナの歴史の起源が、ギリシアよりも古いとされたエトルリアにさかのぼるといふ演出が施されていたことが明らかにされる。

また、「素描集」と呼ばれるヴァザーリの素描コレクションにも目を向ける。過去の画家たちの残した素描を張り付けた各ページには装飾枠が施されているが、それらを比較検討することで、聖遺物箱にもなぞらえうる役割を果たすものとしてとらえ、「素描集」を美術家の「聖異物」のようなものとみなしていたのではないかという、興味深い仮説を提示する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、画家および建築家としてのみならず、美術史記述の嚆矢として名高い『美術家列伝』（第一版1550年、第二版1568年）の著者としても知られる「美術史の父」、ジョルジョ・ヴァザーリ（1511-1574年）の多岐にわたる活動を、そのパトロンであるメディチ家の当主コジモ一世との関係、さらに当時のフィレンツェの文化的、社会的、政治的な文脈との密接な関係において論じるものである。本論文の独自性はとりわけ、一次資料と先行研究を駆使しながら、ヴァザーリが打ち立てた「美術史」の根底にある「儀礼的側面」を浮かび上がらせようとする点にある。そのため本論文では、「テキストによる墓碑」や「記憶のためのパトロネージ」といった、新しい言い回しが提示される。

たとえば、『美術家列伝』（とりわけ第一版）では、各伝記の末尾に追悼詩としてエピタフが添えられているが、これはこの著書がいわば「墓碑」のような役割を担っていることの傍証ではないかと、本論文は仮定する。とするなら、『美術家列伝』とは、13世紀末からミケランジェロの時代までの「墓碑」を身廊入り口から内陣に向かって並べた教会堂にもなぞらえられる。その頂点に立つのが、まさに「神の如き」ミケランジェロである、というわけである。このような建築的なメタファーによる『美術家列伝』の解釈は、これまではっきりとは打ち出されてこなかったもので、本論文の重要な視点でもある。

一方、『美術家列伝』第二版になると、エピタフに代わって、版面による個々の画家の肖像画が重要な要素として加わることになるが、これらの肖像画はそれぞれ、六種類の装飾枠に嵌め込まれている。本論文によると、このような処理もまた、美術家たちを葬る記念碑として構想されたと解釈される。しかも、ヴァザーリの著書はまさしくフィレンツェ公コジモ一世に献呈されているから、フィレンツェの芸術の繁栄を支えてきたメディチ家のパトロネージにたいする賞賛の意図も、そこに込められているという。ただし、コジモ一世とのやや屈折した関係に踏み込んで言及されていないという点では、不十分なところが残ることも否めない事実である。

さらに本論文の評価すべき点は、「画家の礼拝堂」を論じた第Ⅱ部第2章にもある（この部分は美術史学会の学会賞を受賞した）。そこで明らかにされたのは、コジモ一世の援助とヴァザーリのイニシアティブによって設立された史上最初のアカデミー組織、アカデミア・デル・ディセーニョの本拠地であったこの礼拝堂を飾る12体の彫刻群——旧約聖書を代表する六人の父祖、四福音書記者およびパウロとペテロ——の視線が、もともとは真ん中の墓碑板——そこには「死に抗してすらもつねに花開く」とラテン語の銘が刻まれ、その下に何人かの美術家の遺体が埋葬されている——のほうを向いていたという、これまで欧米の研究者たちも見過ごしてきた新しい指摘である。この議論もまた、ヴァザーリのさまざまな活動を、「弔いの儀式」と「記憶のパトロネージ」という鍵概念によって読み解こうとする本論文の主旨を改めて補強するものである。

最後にもう一点、本論文の成果として挙げられるのは、ヴァザーリが生前に積極的に収集した、過去と同時代の美術家たちのデッサンに関する新しい解釈である。これらは「素描の書」と呼ばれ、もともと1000ページ以上はあったとされるが、各美術館に分散して今日に伝わるのは500ページ程度である。それらの一枚一枚には、デッサンの周りに個別に多彩な装飾枠が施されているが、本論文はこれを、伝統的にキリストや聖者たちにゆかりの品や遺骨などの聖遺物を納めてきた棺（聖遺物箱）になぞらえる。つまりヴァザーリは、みずからコレクションした過去の芸術家たちのデッサンを、彼らの記念物ないし聖なる遺品のようなものとみなしていた、というわけである。具体的なテキスト作品分析に基づくこの解釈もきわめて斬新で、本論文の独自の成果として高く評価できる。

このように本論文は、ヴァザーリの著作活動や儀式の演出、コレクションの実践等を、「弔いの儀礼」、「テキストによる墓碑」、「記憶のためのパトロネージ」、「美術の歴史の可視化」、「聖遺物としての素描」などといった申請者独自の斬新な観点から新たに読み解いた点で、高く評価されるものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年1月31日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降